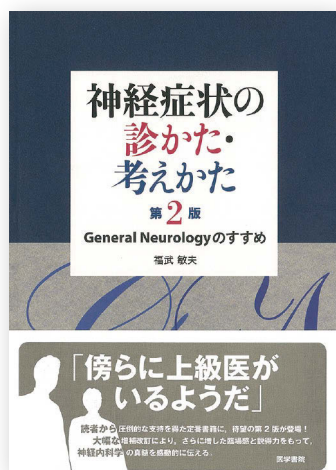




神経症状の診かた・考えかた

General Neurology のすすめ
第2版

福武敏夫＝著

定価：本体 5,200 円＋税
B5・424 頁／医学書院／2017
[ISBN978-4-260-03059-5]

診断に関心のある全ての医師に薦めたい

評者 岩田 健太郎 神戸大附属病院 感染症内科

本書の著者である福武敏夫先生は亀田総合病院神経内科部長であり、前職でお世話になった。私が長く診ていた患者の（私が見逃していた）若年性アルツハイマー病を診断していただいたことが今も忘れられない。

本書の初版が出たのが2014年。通常、医学書の改訂には5年程度かかることが多い。本書のような診断に関する本は特に情報のターンオーバーが（治療の進歩に比べて）緩やかなので、たった3年で改訂されるというのは稀有な話と言えよう。そのことが本書のニーズの高さを物語っている。

“疾患全体”を理解する論理的パズル

本書は「神経診断」の指南書であるが、膨大な回路図や画像、身体診察のナントカ徴候が羅列されているわけではない。そのような細切れの情報では「疾患」という全体性を表現できない、と著者が考えているからであろう。

著者は、本書の中で何度か「論理的思考」「帰納法と演繹法のせめぎあい」という言葉を使っている。現象たる疾患全体を丸のままで理解するには、患者の全体像を把握する理路が必要だからであろう。部分情報の収集が全体像をつくとは限らないからで、パズルのピースをかき集めてもピースの山盛りができるだけなのだ。ロジカルな思考だけが、ピースを像たる全体にする。

診断能力の高い医師は「神経」に強い

本書の博覧強記的な「メモ」は読み物としても面白い。「不思議の国のアリス症候群」の発見者 Todd 氏が「Todd 麻痺」の Todd とは別人だと知るの、ちょっとした知的快感だ。

膨大な症例も勉強になる。筆者が1つひとつの症例をいかに大事にしているかの証左であり、自身の症例報告もふんだんに引用されている。症例報告は大事なのだ。

本書を読むべき読者は、神経内科医のみならず、全ての診断に関心のある医師であろう。診断能力の高い医師は、例外なく「神経」に強い。先日神戸大学の若手神経内科医がL. ティアニーに果敢に挑戦し、そして振り返りにあった（対麻痺で発症した血管内リンパ腫の患者だった！）。オーセンティックな神経内科学の学習は、診断能力の向上に欠かせない。本書を強くお薦めする理由がそこにある。

